

三水会会報

北里大学海洋生命科学部
同窓会会報 第 72 号

平成28年9月発行

編集者 内藤 文隆

発行 三水会(北里大学
海洋生命科学部同窓会)

事務局 〒246-0031 神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル
0120-873-135

目次／2016年8月三陸実習風景	P.1	研究奨励賞受賞御礼	P.5
平成28年度定期総会報告	P.2	〃	P.6
〃	P.3	北海道地区親睦会／準会員活動助成	P.7
小瀧裕一先生 ご退職記念寄稿	P.4	お知らせ	P.8



ホヤ解剖



北日本水産見学



磯採集



釣り実習

「平成28年度 三水会定期総会報告」

平成28年5月21日(土)午後5時より北里大学白金キャンパス薬学部一号館1402教室において、平成28年度三水会定期総会が開催されました。

代議員総数51名に対し、出席数44名(本人出席37名、委任状提出者7名欠席7名となりました)。
冒頭、議長に水産食品学科3期・斉藤勤氏、議事録署名人には水産食品学科6期・堀内岳郎氏、水産食品学科7期・美野朋隆氏を選出いたしました。

その後議事に入り執行部より、平成27年度事業報告及び収支決算報告が行われ、続いて監査報告が行われました。そして原案どおり承認されました。
引き続き平成28年度事業計画案及び予算案の説明があり、原案どおり承認され、提案議事はすべて終了しました。

また、平成28年度事業計画案について、高橋会長より次のとおり補足説明がありました。

1、東日本大震災に係る義援金活動については今年度をもって終了する。
義援金寄付先については、新たに統合する越喜来小・中学校、崎浜公益会等とする。

2、就職ガイダンス終了後、各講師と学生達との交流会を新たに開催する。

3、関東地区親睦会開催に向けての検討会を開催する。以上。

総会終了後、第27回北里大学同窓会研究奨励賞受賞者の28FA・飯田碧氏より、受賞課題の講演をいただきました。

続いて、菅野学部長より写真を交えて、海洋生命科学部の近況等のお話がありました。

その後、緒方副学長も加わり「レストラン白金」にて懇親会を開催、互いの交友を深めました。

『平成27年度事業報告』

1. 会報の発行

同窓生の動向、海洋生命科学部の現状、および各種情報を含む会報を平成27年9月と平成28年3月に2回発行した。

2. 三水会ホームページの运营管理
会員に対し本会の各種情報を提供した。

3. 会員の現状の把握
全学同窓会と連携し、会員情報の正確性の向上に努めた。

4. 親睦会の開催
関西地区の会員を主な対象とした親睦会を平成27年7月4日(土)に大阪市にて開催した。

北海道地区の会員を主な対象とする。

財 産 目 録

平成28年3月31日現在

*一般会計(円)

預金等			
みずほ銀行	三ツ境支店	普 1159267	496,682
山梨中央銀行	小沼支店	普 214393	3,566,632
みずほインバスターズ証券	新宿支店	MMF	606,746
現 金		57,942	
合 計		4,728,002	

*特別会計(円)

(1) 事業積立金

みずほインバスターズ証券	新宿支店	MMF	1,000,000
--------------	------	-----	-----------

(2) 大学助成金

ゆうちょ銀行	〇八八 088	普 15963761	150,126
--------	---------	------------	---------

※一般会計「準会員活動助成」の対象とならない北里大学や準会員以外の団体等に対する助成を目的とする積立金

監 査 報 告

三水会規約に基づき、提出された収支決算書の各事項について監査を行った結果、その内容は適当なもの認めます。

平成28年5月21日

監事 伴 圭司
監事 大野 良樹

平成27年度収支決算書

平成28年3月31日現在

支出の部			収入の部		
科 目	予算額	決算額	科 目	予算額	決算額
1. 事業費	4,950,000	4,196,945	1. 部会助成金	4,792,000	4,792,000
(1) 会報の発行費	2,250,000	2,029,623	2. 会報郵送料補助	704,000	704,000
(2) 三水会HPの運営費	200,000	120,000	3. 前年度繰越金	3,950,881	3,950,881
(3) 親睦会の開催費	400,000	400,000	4. 預金利息	3,000	1,090
(4) 同期会等助成費	200,000	33,000	5. 雑収入	10,000	10,000
(5) 大学・学生との懇談会費	100,000	0	6. 講演会開催費	1,300,000	1,300,000
(6) 準会員活動助成金	200,000	150,000			
(7) 就職ガイダンスの開催費	250,000	87,000			
(8) 漁船海難遭見育英会寄付	50,000	50,000			
(9) 講演会開催費	1,300,000	1,327,322			
2. 運営・管理費	2,370,000	1,833,024			
(1) 印刷・通信費	420,000	291,635			
(2) 会議費	700,000	516,844			
(3) 総会費	300,000	232,598			
(4) 事務局費	900,000	781,947			
(5) 慶弔費	50,000	10,000			
3. 予備費	3,439,881				
4. 次年度繰越金		4,728,002			
合 計	10,759,881	10,757,971	合 計	10,759,881	10,757,971

平成28年度予算

支出の部		収入の部	
科目	予算額	科目	予算額
1. 事業費	3,700,000	1. 部会助成金	4,537,000
(1) 会報の発行費	2,300,000	2. 会報郵送料補助	724,000
(2) 三水会HPの運営費	200,000	3. 前年度繰越金	4,728,002
(3) 親睦会開催費	400,000	4. 預金利息	3,000
(4) 同期会等助成費	200,000	5. 雑収入	10,000
(5) 大学・学生との懇談会費	100,000		
(6) 準会員活動助成金	200,000		
(7) 就職ガイダンスの開催費	250,000		
(8) 漁船海難遺児育英会寄付	50,000		
2. 運営・管理費	2,370,000		
(1) 印刷・通信費	420,000		
(2) 会議費	700,000		
(3) 総会費	300,000		
(4) 事務局費	900,000		
(5) 慶弔費	50,000		
3. 予備費	3,932,002		
合計	10,002,002	合計	10,002,002

した親睦会を平成28年2月20日(土)に札幌市にて開催した。

5. 同期会等の助成
研究室同窓会およびクラブOB会等の卒業生による集会に対して、費用の一部を助成した。

6. 学部・学生との懇談会の開催
学部教員および在学生との懇談会を、今年度は開催しなかった。

7. 準会員活動助成
クラブの活動経費、準会員活動経費の一部を助成した。

8. 就職ガイダンスの開催
各分野の卒業生による就職ガイダンスを海洋生命科学部在学生を

対象に、平成27年10月14日(水)相模原キャンパスにて開催した。

9. 漁船海難遺児育英会寄付
漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行っている漁船海難遺児育英会に対し、寄付を行った。

10. 東日本大震災に係る支援活動や義援金活動の実施
平成23年3月11日に発生した東日本大震災で大船渡市三陸町にも甚大なる被害が発生したことに伴い、被災された三陸町の方々に支援するため、昨年度より引き続き募金活動を行った。

11. 講演会の開催
第50回北里大学同窓会講演会を平成27年11月7日(土)三水会の担当で開催した。

『平成28年度事業計画』

1. 会報の発行
同窓生の動向、海洋生命科学部の現状、および各種情報を含む会報を平成28年9月と平成29年3月の二回発行する。

2. 三水会ホームページの運営管理
会員に対し本会の各種情報を提供する。

3. 会員の現状の把握
全学同窓会と連携し、会員情報の正確性の向上に努める。

4. 親睦会の開催
各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成
研究室同窓会やクラブOB会等、卒業生の集会費用の一部を助成する。

6. 大学・学生との懇談会の開催
学部教員および在学生との懇談会を開催し意見交換を行う。

7. 準会員活動助成
クラブの活動経費、準会員活動経費の一部を助成する。

8. 就職ガイダンスの開催
各分野の卒業生による就職ガイダンスを海洋生命科学部在学生を



対象に行う。

9. 漁船海難遺児育英会寄付
漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行っている漁船海難遺児育英会に対し、寄付を行う。

10. 東日本大震災に係る支援活動や義援金活動の実施
平成23年3月11日に発生した東日本大震災で被災された三陸町の方々をご支援するため、引き続き義援金募金活動を行う。また、義援金の寄付先の選定については、三陸町の復興に資するところについて協議の上で選定することとする。

北里大学の思い出

―退職に際して

応用生物化学講座・准教授

小瀧 裕一

水産学部と海洋生命科学学部での思い出を、感謝の気持ちを含めながら研究を中心に簡単にたどってみようと思います。

1. 貝毒・フグ毒と三陸

20年以上お世話になった北里大 学水産学部（現在の海洋生命科学 部）ですが、私はもともと麻痺性 貝毒やフグ毒の研究をしていたこ ともあり、お世話になる前からそ の存在は聞いていました。大船 渡湾は、チリ地震津波の翌年の 1961年死者1名を含む麻痺性 貝中毒で有名な湾で、同湾にはこ の毒を生産するプランクトンが存 在し、それを食べた二枚貝のホタ テガイ類が毒化しそれが原因で食 中毒が起こることなどが分かって いました。

またわが国では、国内産フグの 部位別の毒性を丹念に調べて、可 食部位を厚生省が通達で示してい ました。本学の児玉正昭先生や東 北大の安元健先生は、三陸沿岸に 水揚げされるフグの毒性をさらに 調べ、コモンフグとヒガンフグの筋 肉部はそれまで大丈夫とされてい ましたが、時にかんりの濃度のフ

グ毒を含み危険なことを報告しま した。その後の通達では、筋肉部 の摂食はコモンフグとヒガンフグの 場合岩手県越喜来湾と釜石湾およ び宮城県雄勝湾で漁獲されるも のを除くということになりました。 どちらも危険な神経毒で、中毒す ると有効な解毒薬がなく非常に危 険な毒です。そんな毒を有する生 物が豊富な三陸は、あまりありが たくないのですが、わが国の猛毒 のメッカともいえるところでした。

このような立地の学部で研究を させていただいた訳ですので、当 然麻痺性貝毒やフグ毒に関しても 研究を進めました。ここでは三 陸に来てから始めた記憶喪失性貝 毒を中心に記したいと思います。

2. 記憶喪失性貝毒との出会い

記憶喪失性貝毒との出会いは、 実は三陸に来る前にありました。 私は、以前米国道アイランド 大薬学部の清水讓先生のところ で1年間博士研究員をしたことがあ りました。私はそこではフグ毒の 前駆体について研究していたので すが、同室の中国人留学生がカナ ダの記憶喪失性貝中毒の原因プラ ンクトンの追求をしていて、毒を 微量作るプランクトンを見つけて 喜んでいたので思い出します。こ れが記憶喪失性貝毒との初めての 出会いです。

その後本学に赴任して初めて手

がけたのが、この記憶喪失性貝毒 に関する研究でした。この毒の本 体は、元々は奄美地方で回虫など の駆虫剤として煎じて飲まれてい たドウモイ酸という紅藻ハナヤナ ズの持つアミノ酸なのですが、一旦 中毒すると重症の場合は脳内の短 期の記憶を貯蔵しておく海馬とい う組織が破壊されるため、アルツ ハイマーと同様な記憶障害が起こ る怖い食中毒です。水産庁の依頼 ですが、児玉教授を中心とするグ ループ内でその年から私が担当す ることになりました。大船渡湾を 中心に一年を通じて、ホタテ貝や ムラサキイガイを調べたところ、 冬季に少し毒化することが分かり ました。毒を生産する原因藻がい るに違いないということとさらに 調べたところ、カナダで発見され たのと同じ種類の珪藻が分離され ました。その頃本学部におられた プランクトン研究の専門家の小池 一彦先生に教わりながら、卒論生 と苦労したことを思い出します。

この珪藻は比較的分離しにくく、 初心者の卒論生にはストレスのた まる作業で、やっと分離し培養実 験で強い毒生産能を確認できた時 のうれしそうな顔は今でも懐かし く思い出されます。このあと記憶 喪失性貝毒生産珪藻について研究

を進めていくことになりました。

3. 出会いのあと

大船渡湾と越喜来湾からは毎年 同藻が分離され、両湾に常在して いることが分かりました。しかし 湾内の二枚貝はほとんど毒化せ ず、記憶喪失性貝毒に関しては両 湾の二枚貝は安全と考えられまし た。また他の研究機関で調べた結 果やこれまでのわが国の食中毒記 録にも、記憶喪失性貝中毒と疑わ れるものがないことから、わが国 では麻痺性貝毒の場合のような貝 の定期的な検査は行わないことにな りました。しかしこの珪藻は、 培養実験の際の毒生産が非常に特 徴的でもしろいので、我々もこ の珪藻の毒生産特性を調べることに しました。すなわち、この珪藻 は細胞が盛んに分裂増殖している 時期にはほとんど毒を作らず、栄 養塩が枯渇したあとに急激に毒を 生産することや毒の生産には培地 内の細菌の存在が重要であること などで、これらの特性は珪藻の



越喜来湾・大船渡湾調査
2015年5月

毒生産機構や毒生産の生理・生態学的意義にも関係すると考え、この点についてその後培養実験で追求しました。卒論生や大学院生ががんばってくれたおかげで、この珪藻の毒生産は微量栄養素の鉄の取り込みに関連して細菌との相互作用の結果起こる可能性が示唆されました。

また、海外学術調査でベトナムを訪れた際、偶然汽水域から分離した変わった珪藻を持ち帰り培養実験で調べたところ、記憶喪失性貝毒を高度に作る事が分かりました。これに関しても卒業生ががんばってさらに調べてくれた結果、この珪藻はベトナムばかりでなく東南アジア各地の汽水域に広く分布すること、この分布拡大には黒潮などの海流が貢献した可能性があること、主成分のドウモイ酸に加えて2種類の異性体も生産



ベトナム・ハイフォン調査
2015年6月

する株があること、これらの毒組成の決定には環境水の性質特にpHの変化が関係している可能性が高いこと、本種は大量発生しないものの場所によっては貝の毒化にも関わることなどが分かってきました。

この研究の過程で、幸いなことに三陸という都会からは遠い場所にながら、ベトナムのほかフィリピン、タイ、インドネシア、マレーシア、台湾などの国々の研究者達と親密に協力し合うことができたことは、望外の喜びでした。本学から東大に移られた福代康夫先生を班長とする東大海洋研の多国間学術調査プロジェクトの有害藻類グループに入れていただいたおかげと感謝しています。そのころの本学部は海外との共同研究が盛んで、三陸に結構な数の外国人が滞在して研究や研修に励んでいたことが懐かしく思い出されます。

4. 東日本大震災

2011年3月11日の震災は本学部の運命に大きな影響を及ぼしました。職員と同窓生の方々の献身的な働きもあって、何とか地震でやられた三陸キャンパスは維持されましたが、結局は学部ごと相模原に移転せざるを得ないことになりました。

大船渡湾、越喜来湾の記憶喪失

性貝中毒に関して、相模原から学生達と出張して数年調べたところ、毒生産珪藻は確かに存在しますが二枚貝はほとんど毒化せず、震災前同様記憶喪失性貝中毒の起る可能性はそう高くはないようです。しかし麻痺性貝毒に関して緒方武比古先生のグループが調べたところ、チリ地震津波のあとと同様、毒生産渦鞭毛藻が大量発生しホタテ貝が長期に渡って高度に毒化しました。同湾の養殖は、最近毒化しにくく生産が容易なカキにシフトして復興中です。越喜来湾の方は、麻痺性貝毒も発生していないことから、ワカメに続き様々な貝類の養殖を試すなどこれまで復興まったた中です。関連して、相模原に避難して初めての研究室の卒業生大谷君は、卒業後の進路として漁師を選び、目下越喜来湾で奮闘中です。

5. おわりに

その他の思い出は、挙げたらきりがないので以下に列挙するだけにします。

車に依存した生活、部活の顧問（地質、剣道、ゴルフ、北里三陸湧昇龍）、クラス主任、三陸売り込み企画体験実習、卒業生との釣りビール・・・。

関わってくださった全ての方々に感謝致します。

研究奨励賞を受賞して

FA 28期 飯田 碧

このたびは、栄えある北里大学同窓会研究奨励賞を賜りまして、深く感謝いたします。選考委員の先生方、同窓会関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

私は水産学部（現海洋生命科学部）在籍時は、環境生態学研究室に所属し、井田齊先生、朝日田卓先生、林崎健一先生にご指導をいただき、卒業論文では三陸沿岸の碎波帯に出現する仔稚魚相についての研究に取り組みました。水産学部を卒業後、東京大学海洋研究所（現大気海洋研究所）／大学院農学生命科学研究科に進学し、塚本勝巳先生のご指導のもと、博士（農学）を取得いたしました。学位取得後は、琉球大学、フランス国立自然史博物館での研究員を経て、昨年度から新潟大学で教員としております。



高橋会長と飯田氏

今回の受賞内容は、「両側回遊性ハゼ亜目魚類の回遊生態の多様性に関する研究」で、私が大学院からこれまで行っている研究です。大

学院で所属した研究室では、回遊魚や回遊する生物の生態についての研究が行われていました。漠然と回遊する魚の生態について研究したいと思っていた私は、いくつかのテーマの中から、ボウズハゼという魚の生態を研究テーマとして選びました。三水会のみなさまの多くはアユの生態をご存じだと思えます。アユは、秋に川の下流で産卵して、生まれた仔魚は海で冬を過ごし、春になると再び川へ帰ってきて藻類を食べて成長し、秋の産卵に備えます。産卵すると多くの場合、死んでしまいません。餌を盛んに食べる時期になわばりを作るため、なわばりに侵入する個体を追い払おうとする行動を利用したのが、アユの友釣りです。アユのような生活史を両側回遊（りようそくかいゆう）とよびます。ボウズハゼもアユと同じように両側回遊を行うと考えられています。食餌はほとんど行われておらず、よく分かっています。アユについては、それまでも多くの研究が行われており、ボウズハゼも同じような生態を持つのだろうかという予想のもとに研究を開始しました。

ところで、同じ回遊魚でも、なぜ両側回遊魚を選んだのでしょうか。

か。回遊魚には海だけを回遊するマグロなど、海と川を行き来する通し回遊魚などがあります。通し回遊魚は、サケ科のように産卵のために川を遡る遡河回遊魚、ウナギ属のように産卵のために川を下る降河回遊魚、そして産卵とは無関係に海と川を行き来する両側回遊魚の3つに大別されます。産卵というのは生物にとって大きな生活上のイベントです。通し回遊魚を研究する理由として、海と川との間の移動がなぜ起こるか知りたいのですが、産卵と同時に起こる移動をみると、産卵という大きな出来事によって移動の原因を追及するのが難しくなります。そのようなわけで、両側回遊魚を研究对象としました。

研究は野外調査を主体とした生態研究で、一年のうち多くの期間をフィールドである紀伊半島・和歌山県南部で過ごしていました。この地域は、三陸と負けず劣らず首都圏からのアクセスのよくない場所です。研究費節約のため、東京からの移動は夜行バス、修士課程のうちは毎月、博士課程では一度行くと2、3ヵ月、という滞在でした。余談ですが、紀伊半島は、私の滞在中に熊野地域が世界遺産になり、そもそも熊野大社など古くから他の地域から訪れる人のあ

る場所でしたが、それでも深い山によって水は澄み、美しい地域です。この紀伊半島での研究生生活が全く苦にならなかったのは、三陸で過ごした3年間の影響が大きいと考えています。

話を研究に戻します。私が研究を開始した時点で分かっていたのは、調査地である和歌山県の川では、毎年夏になるとボウズハゼが大挙して時には水から体を出してまで上流を目指して「岩登り」をするということくらいでした。このような現象から、海と川の中だけなく、川の中でも季節ごと移動をしているのではないかと考えて潜水観察を行いました。本種が石の下で冬眠することだけが分かりました。次に、産卵期や成長パターンなど、基本的な生活史を明らかにするための調査・研究を行いました。その結果、生活史は四季に対応してきつちりと決まっていること、アユより小型なのに6年も生きることなどが分かってきました。どうやら最初の予想とは少し違い、アユと全く同じではなさそうでした。次に、生まれてすぐや海で過ごす仔魚の生態を明らかにしようと、野外調査に加えて、飼育実験をしました。すると、ボウズハゼは川で生

まれるのですが、淡水で飼育していると発育が進まずそのまま死んでしまうのに対して、塩分の含まれた水で飼育すると順調に発育することが分かりました。淡水で生まれるのに、淡水では生きていけない不思議な生態をもっていたのです。色々研究を進めると、ボウズハゼは近縁種の熱帯に生息する種と似た特徴を持っていて、みな、海での生活が必須ということが分かりました。アユは、琵琶湖のような淡水湖で生活史の初期を過ごすことができたりと、どちらかという淡水魚に近い生活史をもっています。つまり、アユとボウズハゼは淡水よりか海水よりか、という根本的な部分がずいぶん違っていました。

このような内容で博士号を取得して、次は生物多様性の高い、琉球列島で研究を進めました。そうすると、同じ川の中に棲むハゼでも、種によって淡水よりか海水よりかというような傾向の異なることが分かりました。なかなか、なぜ魚が回遊するのか、という最初の疑問に対する答えにはたどり着きませんが、回遊には環境が大きく影響するだろうという予測のもと、今は勤務地である佐渡島を中心に研究を行っています。昨年初めて佐渡へ来て、島だけでも、

どことなく三陸を思わせる雰圍氣に懐かしさを覚えました。島という生態的に興味深い地域で、これからも通し回遊の生態を解明する研究を進めていきたいと考えています。最後になりましたが、これまでの研究は多くの方の支えによって行うことができました。この場を借りて感謝いたします。

北海道地区親睦会が開催されました。

F A 3期 水鳥 純雄

平成28年2月20日ネストホテル札幌駅前において、冬の悪天候にもかかわらず大学から緒方副学長と野村名誉教授、また、三水会から高橋会長と長谷川理事にご臨席頂いただき総勢28名で北海道地区親睦会が開催されました。講演では、緒方副学長からは、相模原に新設されたキャンパスの姿や華やかで充実した学生生活の現状と、震災後に整理された三陸の校舎などについてお話し頂き、目覚ましい発展を続けている海洋生命科学学部に参加した会員一同感激しました。また、野村名誉教授からは、震災時の映像を交えて三陸の状況についてお話し頂き、この災害の激しさと復興の現状を実感し

ました。さらに、高橋会長と長谷川理事からはご丁寧なご挨拶等頂きました。懇親会における参加者の近況報告では、なつかしい三陸での思い出話はもとより若い会員の活躍ぶりに感心させられ、また、定年退職を迎えた会員の元氣な生活ぶりも報告されました。次に、前回も好評となったビンゴゲームを行い、会員のご厚意で数多く集まった北海道産水産物などの景品が参加者全員に配られました。景品を受け取られた方々は皆その豪華さに感激して景品を提供していただいた会員に感謝していました。二次会にも多くの方々が残り、学生だった時のように盛り上がり楽しい札幌の一夜を過ごしました。皆さんご満足いただけただけです。翌日2月21日には、緒方副学長や来賓の方々、飛行機搭乗までの待ち時間で札幌ビール



園に練り出し、日本のビール製造の歴史に残るレンガ造りの製造工場を眺めながら、ここだけでしか味わえない特製の生ビールでジンギスカン鍋を囲みました。

平成28年度三水会準会員活動助成

海洋生命科学部北里会
北里三陸湧昇龍部 主将 3年 阪 圭介

この度は、三水会準会員活動助成金を交付して頂き誠にありがとうございます。私たち北里三陸湧昇龍部の活動を評価して頂けたことを、大変光榮に思っております。北里三陸湧昇龍部員一同を代表いたします。心より御礼申し上げます。

東日本大震災後、海洋生命科学部がここ相模原キャンパスへ移転してから5年が経ちました。北里三陸湧昇龍部は三陸時代に結成され、よさこいを踊り続けて14年となりました。現在は男子部員14名、女子部員52名の総勢66名で活動しております。相模原市を中心に、東京・埼玉・岩手など各地で活動を展開し、精力的に活動を続けています。相模原に移ってから部の基盤を築いてくださった先

輩方、部を支えてくださった小瀧先生や吉永先生、お祭りに呼んでくださる主催者の皆様の支えがあったからだと思えます。本当にありがとうございます。

1月に開催した小瀧先生の祝賀会では、多くのOB・OGの方々に参加され、世代を超えた交流の場ともなりました。小瀧先生やOB・OGの部に対する思いを知ることができ、これからの活動を充実させていこうという気持ちが強まりました。結成当時から意思や伝統を受け継ぎつつ、現在の北里三陸湧昇龍部の新しい活動を开拓することで、少しずつ進化していこうと思えます。まだまだ未熟な点多々あるかと思いますが、これからも見に来た方々に笑顔をお届けできるよう精進して参りますので、ご支援、ご指導のほどよろしくお願い致します。



— 三陸義援金締め切りのお知らせ —

三水会長 高橋 明義

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災により、昭和47年（1972年）の水産学部創設当初よりお世話をいただいております、大船渡市三陸町越喜来（旧気仙郡三陸町越喜来）も甚大な被害を受けました。私ども三水会員の第二の故郷とも言える三陸町へのご恩返しとして、支援活動及び復興活動の資金として使われることを目的に、三水会は大震災直後から義援金の受付を開始いたしました。これまでに数多くの皆様より寄せられた義援金は平成28年7月25日現在で13,441,772円にのぼります。そして次のとおり総額9百万円を支援させて頂きました。

- (1) 越喜来漁業協同組合に300万円（平成23年6月17日）。
- (2) 三陸港祭り実行委員会に300万円（同7月15日）。
- (3) 社団法人崎浜公益会に200万円（同9月21日）。
- (4) 越喜来小学校災害基金に100万円（平成24年4月28日）。

本年3月には震災発生から5年が経過いたしました。諸般の情勢を勘考し、平成29年3月31日を持ちまして一旦この義援金活動を締め切らせていただくことを考えております。平成28年5月末日現在でお預かりしている義援金は約440万円でございます。が、あと半年間のこの活動を通じて、三水会員の気持ちを少しでも多く三陸町の皆様へお届けしたいと思っております。今後も皆様方の暖かいご支援をお願い申し上げます。

最終の寄付先として、将来、地域と日本あるいは世界を背負う人材の育成を願って越喜来小学校ならびに越喜来中学校、また、北里大学水産学部・海洋生命科学部卒業生の大多数が仮の宿としてお世話になった崎浜地区の社団法人崎浜公益会等に対する寄付を検討しております。

義援金窓口；郵便局・ゆうちょ銀行
口座記号番号；00510-6-100763
口座加入者名；三水会援助の会



“ 掲 示 板 ”

■ 三陸の思い出写真展ご案内とお願い

私たちが学生時代を過ごした三陸の魅力と思い出を、多くの方々にお届けする写真展を下記のとおり開催します。また、卒業生皆様から三陸の風景や集合写真等、思い出写真提供のご協力をお願いします。

開催日時：2017年3月10日（金）～2017年3月12日（日）

開催場所：エッサム神田 1階ギャラリー（JR神田駅東口徒歩1分、東京メトロ銀座線 神田駅3出口前）

＜写真提供の受け入れ＞

- ① メールでの送付：お持ちのパソコンでウイルスチェックを行い感染していないことを確認した上、撮影場所、撮影日時をタイトルにご記入し下記まで送信ください。（画像データの場合 例）19871008崎浜.JPGなど）
- ② 写真の郵送：ご提供いただける方は、送付先の住所をご連絡致しますので下記に問い合わせ下さい。また、写真の返却をご希望される方は、写真の裏に氏名を記入し、ご住所と氏名を記入した返信用封筒（切手を貼ってください）を同封のうえ、送付をお願い致します。こちらも写真の裏に撮影場所、撮影日時をご記入ください。

写真は、お一人様最大5枚までとさせていただきます。なお、ご提供いただいた写真につきましては、企画本部にて選別を行わせていただきますので、予めご了承ください。（写真提供締め切り11月末まで）

- ① ②とも越喜来チルドレンまで（メールアドレス：sanrikuphoto@gmail.com）主催者代表 FM32期：山本浩司

編集後記

あの東日本大震災から5年半が過ぎました。いまだに東北地方は復興の道半ばですが、そんな折、ことしの4月には熊本で大きな震災がありました。漸く地震は収束に向かっているようですが、復興はこれからのようです。会員の中にも被害に遭われた方がいらっしゃると思います。この場をお借りしてお見舞い申し上げます。地震や津波による被害の復興には多くの年月がかかりますが、さらに原発事故の被害はその実態すら不明なまま記憶から消えようとしています。「天災は・・・」と昔から言われているように忘却することが被害を大きくし、復興を遅らせることになると思います。関東大震災を忘れないために設けられた防災の日を迎えたことでもありますので、改めて東日本大震災と熊本地震そして原発事故について考えてみるのもよいかもしれません。